

A wonderful experience pf living in Tronto

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/33590

【留学報告】

トロントの空気にふれて

～トロント大学留学報告～

A wonderful experience of living in Toronto

金沢大学医薬保健研究域医学系恒常性制御学
(第一内科学)

金沢大学附属病院救急部

村 井 久 純

私は2008年7月から2012年6月までの3年間カナダのトロント大学に留学していました。2012年7月より金沢大学附属病院 救急部にて仕事をさせていただいております。日が経つのは本当に早いもので、日本に帰国して1年半になろうとしています。この度、留学中の報告を書かせていただける機会をいただきましたので、まとめてみたいと思います。

トロント大学に留学した経緯

もともと、医学部を卒業してから、いい臨床医になればいいなとただ漠然とした目標を持ちながら、恒常性制御学講座(旧第一内科)に入局しました。循環器内科を専門とし、当時の第4研究室のチーフであった高田重男先生の元で徐々に臨床研究をしているうちに研究のおもしろさを実感し、幸運にも、生理学の雑誌では、一流誌のひとつであるAmerican Journal of Physiologyに2006年に論文を発表することができました。当時、留学願望が強くあったわけではありませんでした。同僚が1人、2人と留学に旅立っている姿をみていると少しずつ羨ましくなっている感情が見え隠れしていました。ちょうど、論文が発表され、一年がたったころに、トロント大学のJohn S Floras先生より、私の発表した単一筋交感神経活動測定に興味があるため我々のラボにて共同で行わないかとメールを頂きました。あまりにも驚いたメールだったので、大変嬉しかったと同時に今でも強烈に記憶に残っています。これに対し、私の所属する現在の第4研究室のチーフである高村雅之先生、恒常性制御学講座の金子周一教授も留学に対して、快く思ってくださいました。こうした背景があり、2008年7月よりJohn S Floras先生のラボで循環器内科のリサーチフェローとして留学することができました。

トロント大学へ

トロントは、冬の寒さは厳しくマイナス20度まで低下しますが、夏場は湿気もなく、気持ちの良いところです。繁華街は、大都会ですが、40分ほど車で移動すると、のどかな自然があふれた田舎町に変わってしまいます。私の滞在したトロント大学は創立が1850年でカナダ建国が1867年であり、古い州立(カナダの大学はすべて州立)の総合大学です。薬学部の研究グループが1921年にインシュリンを発見し、ノーベル賞を受賞したことも知られています。カナダの大学間で比較しますと研究費の獲得率では図抜けていて、研究部門ではいわゆる「名門」であることがわかります。日本而言えば、東京大学に例えられ、自分で言うのもなんなのですが、トロント大学で仕事できたことは自分で

誇りに思っています。私はトロント大学の前にあるトロント総合病院(Toronto General Hospital: TGH)にて心不全と自律神経の権威であるDr. John S Florasの下、臨床研究していました。トロント総合病院はいわゆる「大学“付属”病院」ではなく独立した病院ですが、日本でいうところの「大学病院」に相当するトロント大学と提携する「University Health Network(以下UHN)」という病院群の中の循環器部門として位置しており、スタッフはトロント大学医学部の循環器内科教員として兼任しています。UHNにはトロント総合病院のほか、がん専門病院であるプリンセスマーガレット病院(Princess Margaret Hospital: PMH)トロント小児病院(Sick Children's Hospital)、トロント西部病院(Toronto Western Hospital: TWH)が含まれ、卒後臨床教育機関としてトロント大学での研究活動と強力に連携しています。私のトロントで行っていた臨床研究といっても、新しいことをするわけではなく、昔から金沢大学恒常性制御学講座(旧第一内科)の第4研究室で行っている筋交感神経活動記録(MSNA)をもちいた自律神経の評価を心不全患者などに行っていました。ただし、今回の留学では、研究するだけでなく、私が金沢大学恒常性制御学講座で発表した新しい解析法である単一筋交感神経活動測定をトロント大学のラボに導入しなければいけないという使命が課せられおり、当初は、機械も器具もすべて違うため、大変、焦りました。ただ、次第に環境に慣れて来ると、周りが見え始め、新しい解析方法や優秀な研究者が集まっているため、刺激的な毎日の連続でした。ラボ(Cardiovascular Clinical Physiology Laboratory)では、みんなやさしく接していただき、ありがたく思っています。当初は自分の英語力のなさで彼らの時間を割いてはいけないと思い、“YES”か“No”の二つで過ごしていましたが、彼らと仲良くなっていくに従い、徐々に、自分の言いたい事が表現できるようになってきました。およそ、半年ぐらいかけて無事、単一筋交感神経活動測定ができる環境ができ、なんとかトロント大学の倫理委員会に承認されるまでに、一年が経過していました。この最初の、一年間が、今思えば、良い思い出ですが、ストレスの連続であったことが思い返されます。その間、Floras先生やリサーチナースのBevには迷惑をかけたな一と思えます。でも、いつも、彼らが、暖かい笑顔とゆっくりとした僕の話に対し耳を傾けてくれたことは、いまでも感謝しています。

職場環境の違い

一番大きな職場の違いは、日本では仕事を優先し、家族を犠牲にしてしまうのに対し、カナダでは家族を優先し、仕事を後回しにすることで



CN (Canadian National) タワー (553.33m) には5回くらい登りました

した。私は、トロントで留学したのころ、研究機材のセッティングがうまくいかなくて夕方の6時(5時で終わりのところ)までコンピューターをいじっていたら、Floras先生がラボに入ってこれ、'5時以降は家族のために時間を使うべきだよ。今日の仕事は明日でいいよ。'と声をかけられました。実際のボスからそのように声をかけられたのは、大変驚きでした。ただ、早く帰れるといっても、トロントでは、日中の集中力が、根本から違っていました。日本にいた頃、外国人は、早く家に帰るので仕事に責任感がないのではなかろうか?と間違っただけ解釈をしがちでしたが、実際は違っていたことを痛感しました。日本で仕事していると、ついつい、夜までできるのでガラガラしがちでしたが、トロントでリサーチをしている人たちは、俗に言うONとOFFのスイッチの切り替えが実にうまくされていると感じました。

プレゼンテーション

当たり前ですが、トロントのラボでも週一回のカンファレンスがあり、毎回、その週にあった実験データや研究結果の解釈に対してプレゼンテーションしなければなりません。私は、学生時代から英語がうまかったとはお世辞にも言えず、大変苦勞しました。しかしながら、Floras先生が辛抱して頂いたおかげで、最後の頃には、みんなに伝えるレベルまでは、持っていったと思います。うまく伝えることが、できた日は、やはり準備に時間をかけた時であり、これは、日本語であっても一緒だと感じました。また、Toronto General Hospitalでは、生理学の実験だけでなく、研究室が病棟と同じ階にあるため、患者さんに関することや、症例カンファレンスもあり毎週参加していました。そこで、レジデントの発表をみていると恒常性制御学講座(旧第一内科)のカンファレンスをいつも思い出していました。大変驚いたことは、内容は所詮レジデントのレベルなので簡単な内容を話すのですが、レジデントのプレゼンテーションが上手なことです。これまで、外国人のプレゼンテーションはどこかの偉い先生の話は聞いたことがあり、上手なのは当たり前!という感覚があったのですが、トロント(おそらく北米のほとんど)の人は、人前で話をする文化があるんだと痛感しました。また、レジデントが優秀なのか、他の先生たちが温厚なのか、罵声はなく、みんなできさしく指導している感じでした。レジデントや学生が

出来の悪いのは勉強しない奴が悪いという感覚はなく、レジデントの教育には、指導医だけでなく科、全体で行っており、出来が悪いのは科全体の責任というところから取って非常に熱心でした。みんな自分自身の仕事をこなす必要もあるのかかわらず、教育に時間をかけていることに感心させられました。

留学して良かったこと

私は家族4人でトロントにいきました。留学中の3年間楽しいこともありました。仕事での辛いことが多く、家族の支えなくして異国での仕事は継続できなかったと思います。妻には、今でも、付いてきてくれたことに感謝しています。当時、長女は10歳で長男は2歳、長女は英語も知らないまま日本人が一人もいない現地校に通い、初日に泣いて帰ってきたのが可哀想で慰めていました。しかしながら、子供の順応力というものはすごいもので、聞いてはいたのですが、1週間もしないうちに友達ができ、1年もすれば、英語の聞き取り能力は20年間英語の勉強してきた親を超えていました。長男は、日本語も喋れない状況でトロントに行ったので、英語環境のほうがなじんでしまうようになってしまいました。帰国してからのほうが逆につらくなってしまったようです。留学中の生活は、親バカながら、彼女らの、今後の成長のプラスになってくれればいいと思っています。この留学中、家族が大きな病気もせず、みんな笑顔で帰国できたことは一番の喜ぶべきことなのかもしれません。カナダのような大自然の多い所で家族とともにゆっくりとした時間を過ごせたことは、これからの生活においても非常に有意義であると思っています。

また仕事において、自分たちの日本での研究室のシステムだけでなく、海外のラボでの大きな研究業績において実験・研究を効率良く進めるためのプロセスやシステムがどのように行われているのかを知ったことは、今後、日本で研究していく上で大きなアドバンテージになると考えています。自分も16年目になり教育する側にたった人の責任感の強さを知り、後輩への指導の大切さも改めて感じました。

最後になりますが、素晴らしい留学の機会を与えていただいた金子周一教授、高村雅之先生、研究のイロハを指導していただいた現金沢市立病院院長の高田重男先生、湯浅医院院長の湯浅豊司先生、また、大学中に実験のサポートをしていただいた4研スタッフの方々に深く感謝します。ありがとうございました。



家族でFloras先生のホームパーティーへ